

---

# ラブカクテルス その78

風雷人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブカクテルス その78

### 【Nコード】

N9367E

### 【作者名】

風 雷人

### 【あらすじ】

今宵は南の島のカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は南国タバコでございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺はタバコが嫌いだ。

しかし親父はタバコが好きだった。

なんだか知らないが、甘ったるい匂いがするタバコをいつもくわえていた。

そして周りが禁煙の世の中になっても親父は、家族の意見にも耳を貸さずに結局タバコを止めることなくして拳銃の果てに癌を患い、そして大した年寄りにもならず亡くなってしまった。

しかし俺はもう独り立ちしているし、母さんもそれなりに忙しい人だからあまり親父の死で周りの生活に何かの影響することはなく、葬式の後はいつもと同じ時間がしばらくは流れていたほどだった。しかしそんなある日、母さんから珍しく電話があり、俺に時間がある時でいいから親父の遺品を片付けるのを手伝いにくるようにと連絡があった。

俺は返事をしばらく濁していたが、母さんが重い荷物ばかりで女一

人には無理だと泣き付いてきた末、結局次の日曜日に借り出されることとなったのだった。

俺はいやいやため息を吐きつつ、その電話を切った。

なんだか台風が近づいている湿気が多くて過ごしづらい日曜日、それでも足取りが重い俺は、昼時前にようやく実家に顔を出した。

既に暑さでハアハア言っている母さんを促し、昼食を食べてから片付けをしようと言い出す俺に母さんは、俺のやる気のなさを悟ったようで、働かざる者に出す飯なしと手厳しいセリフを吐いた。

そしてそんな凶星の俺は苦笑いをするしかなかった。

そばをすすりながら母さんはおもむろにこんな物が出てきたと、あらくしゃくしゃになった紙の塊をお膳の上に走らせてきた。

それは何枚かの写真と何かの鍵、そして例のタバコが一緒に入れられた、粗末な紙袋だった。

そしてその紙袋には何語か解らない単語が幾つも書かれてあり、アルファベットではあるが、英語ではなさそうな感じの文字だと、いい加減な大学出の俺の知識でもそれがわかる柄の変わった包装紙だった。

そしてそのかなり古いと思われる写真には、真っ黒に日焼けした若い日の親父とわかる青年と、その外国なのであろう、現地の親しげな青年との溢れる笑顔が写っている。

俺はこれが何かと母さんに聞いてみたが、わからないと母さんは首を振る仕草をしながらそばを食べ続け、それが落ちて着いたのを見計らって、あの人が外国に行ったことがあるなんて話は聞いた事がないと、咳こみながら言った。

俺はなぜだかその写真からなかなか目を離すことができずに、そばを摘んだままの箸をそのままにそこに写る親父の今まで見たことのない笑顔にぼーっとした。

そしてそれらと一緒に入っていた鍵。

俺はその紙袋の中に写真と鍵の、何か手掛りになるものがないかと逆さにして振ってみたりしてみたが、それ以外のものはやはり入ってはいなかった。

しかし、母さんが見ていた写真の裏に何か文字があるのに気付き、写真の全てを裏返しにしてみるとボールペンで書かれた確かに親父の筆跡である走書きが幾つかあるのがわかり、それは日付、それとカタカナ書きでの地名であろうか？、馴染みがない言葉が乱雑に書かれてあったのに気付き少し興奮した。

俺がそんなことにウツツを抜かしているのを母さんはいい加減にしろと、そばの器を持って立ち上がると軽く俺の頭を叩き、そそくさと台所に消えた。

俺は頭を擦る仕草を大袈裟にしながらそばの続きをすすり、しかし目は写真と鍵から離すことがなかった。

その日の帰り、俺は例の紙袋を母さんに断りを入れて持ち帰ることにした。

親父の遺品整理をしながら聞いた母さんからの親父の昔話に華が咲く中、大して興味もなかった親父の若き日の姿が、なんだか自分が知っている親父から想像できずに妙に探求心に火を付けられたせい、そんな昔の親父のことを少し知りたくなつたのだった。

俺の知っている親父。

それは仕事を大工とし、その気性のおかげで会社を転々と変えては落ち着かない偏屈者で、我が家の家庭はかなり不安定なものだった。その上に口うるさく、手がすぐに出るのは職人の癖だとよく母さんに言われ、どちらかと言えば俺はそんな親父が嫌いだった。

昔から恥ずかしくて友達にはその姿を見せたりしたくなかったし、何より職人である特有の黒い肌と、普段のだらしなくセンスの微塵もない格好。そしてあの甘い匂い。

しかし母さんの話しでは親父曰く、タバコで身体の汗臭い匂いをごまかしてるのだと、いつか母さんに言ったことがあるらしいが、母さんに言わせると、止める止めると言うしつこい言葉を濁すための口実だらうけど。とのことだった。

そしてケチであり、小銭を貯める親父は焼酎の瓶にぎっしりと詰めた空き瓶貯金箱をいくつもリビングに飾り立て、酔っ払うと口癖のように、三百万貯まったら皆を旅行に連れてってやるとご機嫌だったが、開けることもなく、数えることもせずに親父はあの世へ行ってしまった。

きつと一円や五円ばかりだったから、あっても三万円、いや、一万円というところだろう。

俺は暇な時間を使ってそんな親父の遺品となった謎の紙袋を広げ、パソコンに次々と気になる言葉を打ち込んだのは、昔の俺が知らない親父を知るための手掛りをネットを使って探し始めた。

手紙の裏の単語などの意味を調べるに連れて、どうやらそれらが場所や人物などの名前らしきものだということが浮かんできた。

それがアジアの中の神秘的な島であるという事も含めて。

まさに南の楽園と言われている観光で有名なその小さな国。

俺はその島国についてガイドブックやツアーガイドなどで詳しく調べ出すと、いよいよそこを訪ねてみたくなってきたのだった。

大体の親父がその島で過ごしていた地域も特定してきたし、写真にある親父と親しげな人の名前らしきものもその裏に書かれていたことから、当時のことを訪ねるにはその人を見つければ何とかかなるという気にもなり、それにまあ、最悪は何も知ることができなくても、ただの観光でも行くとすれば悪くない。

俺はその誘惑に駆られ、仕事の休みに合わせた休憩を利用してチケットを取ったのだった。

空港を出た瞬間から物凄い湿気が身体にまとわり付いてきた。

これがこの南国の歓迎らしい。

歓迎といえ、カバンを転がす、いかにも観光客である俺のところには、タクシーの運転手がヤケに親しげな態度でたどたどしい言葉巧みに、無理矢理な案内を仕掛けてくる。

俺は必死にそれを断り、予約を入れたホテルからの迎えを探し、そして何とかその手書きで書かれたプラカードを掲げた、見た目が頼りない色黒の男に手を振りながら、異国で初めて味わう不安から逃れることができた。

しかしその男が乗るように勧めてきた車は俺が想像していた以上のポンコツで、大手の旅行代理店での手配とはいえ、一番安いホテルだと迎えにもこんなに差が出るのだとは予想外だった。

それでもホテルの男はにこにこしたぎこちない笑顔を絶やさずに、これまたぎこちない変なイントネーションの言葉を使って、俺が車に乗ったのを確認するとなぜだか、カーステレオのポリウムをめいっばい上げながらご機嫌に鼻歌を歌い、派手な運転でホテルまで飛ばし始めた。

郷に来れば郷に従えか。

揺られる車の中で俺は、そんな扱いをされながらも何か懐かしい空気がそこいら中に漂っている気がして嫌な気分ではないことに不思議さを感じだしていた。

ロクな舗装もない路を半時ほど走った先に俺が泊まるホテルがあり、大きなプールと、椰子の葉であろう感じの物で出来た涼しげな屋根を持つ木造のロッジは思っていたものよりも好印象で、俺は安心からか自然と笑顔になった。

何しろあの車と運転手からの想像では、もっと凄い宿になると覚悟していたところだったが、そのホテルはそれ程くどくない、この島の神様らしき物を象った石像や、ユーモラスな木彫りの人形などが迎え入れてくれるロビーが真ん中にあり、その筒抜けになったホールを潜った先には丸いプールが広々と、そして青が爽やかに時折光を反射させて涼しさを演出している。

周りにある椰子の木達も、まさに楽園らしさをアピールしていて俺の気持ちをワクワクさせる。

そしてその周りを、円を描くように複数のロッジが囲んでいて、その各ロッジの前にはビーチベッドが、さも昼寝用にと置いてあり、どこをとってみても清潔感が気持ちいい。

ロビーへ向かう翫を運転手に連れられて入ってみると、これまた人なつっこそうな童顔の男がカクカクの言葉を使って俺に手続きを求めてきたので、言われるがままサインをする。すると男は笑顔と共にウエルカムドリンクをと、シャレたストローがささっている、見慣れないフルーツの一片がグラス縁に飾られた色鮮やかなオレングジの飲み物を差し出してきた。

俺はなんのためらいもなくそれに口付けてみるとかなり甘い、それでいてミカンとは明らかに違う味に驚き、そして気に入った証拠に思わず声をあげてしまった。

それを見たロビーのそのスタッフは、またニヤリと笑い、オイシイナツコレと俺の知らないその元となっているのであるうフルーツを手渡し、ジェスチャーでカブリついて食べるように説明してきた。

俺はそれに従い、思い切つてカジリ付くとそれは確かに食感から言つても変わったフルーツで、味も申し分なく、それを食べたただけでも南国いる気分を満喫したかの如く、まるでようやくここに腰を降ろした、そんな気分させるものなのだった。

お陰で俺にもそのニヤニヤが移ったくらいだった。

そしてそんな、やけにフレンドリーな南国の人々の雰囲気には俺は何か言いようなない柔らかかな時間の流れを感じ始めて初めて来た土地だというのにやたら居心地の良さを感じるのだった。

ロッジに荷物を降ろし、フワフワでヤケに大きいベッドに身を預けてみると、身体が沈んでしまう程の予想を上回る柔らかさに思わず、捕まるところを探してしまうくらいにそれに、一人なのにも関わらずに、その自分の慌てように笑ってしう始末だった。

部屋はベッド以外は小さなテーブルと椅子があるぐらいで、あとバスとトイレだけでエアコンはなかった。

しかし不思議と涼しく、抜ける風のせいでその必要がないのは直ぐにわかり、俺は一息つくのに天井を仰いだ。

少し自分の中で落ち着きを持ったところで俺は水着に着替えてプールに入ることにした。

水はそれほど冷たくはなく、俺は背泳ぎをしながらゆっくり水をかき、その内プカプカと浮いてみた。

水に浸かった耳からは自分の心臓の鼓動が鈍く聞こえてくる。

見上げる空には青い空に申し訳なさそうに流れる白い雲の切端が幾つか漂う。

これが親父がいた南国か。

俺は目を閉じてここにいた親父を想像しようとしてみた。

親父もこうして水に浮かんで空を見たのだろうか？

しかし想像力はこんな時間の中ではあまり広がることがなく、頭が働きたくない病にでもなったかのようだった。

風が気持ち良く水上を走った。

確かにぼーっとしないといけないかのようだ。

プカプカ浮いた俺はそう思うのが精一杯のようだった。

夜は近くのレストランが旨いと、ロビーのフロントに勧められて足を運ぶと、何かそんな雰囲気と言わんばかりのレストランがやはりあった。

まるで普通の家のテーブルのような席に案内され、そこにはロウソクが真ん中にあり、ウェイトレスがそれに火を入れてくれる。

出されたメニューにはきつと、観光客のせいで三ヶ国語で書かれた写真付きの判りやすい料理達が並んでいたが、俺はスペシャルの文字に誘われてそれを指さした。

ウェイトレスはニッコリ笑って、オツケーと一声出すと、そそくさとカウンターに入って行った。

先に頼んだビールは直ぐに運ばれてきたが、それには氷が入っていたのに俺は文化の違いを感じてびっくりしながら、また一人なのにも関わらずに苦笑してしまったのだった。

窓際のその席には、大部分が観光客であろう人の流れがまるで、祭りの縁日を行き交う光景のようで、それをツマミにその氷入りビールを喉に流す。

すると何だか何かが起きるのではないかと思わせるその雰囲気にもなくワクワクした。

料理が運ばれてからも、普段は十分ほど食べてしまう食事をゆっくり手を付けては、氷入りビールを片手に持った。

そしてそれがだんだんとヤケに美味しく感じ始めてきたのはきつと酔ってきたのが原因ではないと思う。

なぜならちゃんとビールをオカワリした本数は覚えているのだから。その夜、いい気分でロツジに帰り、俺はベッドに横たわって眠りに着いた。

疲れから直ぐに深い眠りに落ちた筈だったが、俺は何かの気配に目を覚ました。

それはガサゴソという音を立て、どうやら天井にいるらしいが暗いのと、寝起きのために視力が完全ではないためにそれが何だかわからない。

しかしその内、それはケタタマシイ音を何回も繰り返し、俺はそれに驚き部屋を飛び出した。

急いでロビーのフロントを呼びつけて訳を話すと、フロントは何回鳴いたかと訪ねてきた。

俺はこんな時に何を言っているのかと、少し不機嫌に興奮したまま首を傾げ、そんなもの数えてないと言うと、フロントは少し笑いながら説明してくれた。

それはトカゲのトクトクといい、この島ではよく見かけるものだが

悪さはしない。

逆に七回トクトクが鳴くのを聞くことが出来たら、何かいい事が起きるなんていう言い伝えがあるそうで、そんなトクトクは確かに口ビーの木彫りの飾りにもある程だった。

俺はそんな話しに関心しているとフロントはプールの脇にあるちよつとしたバーを開けて明かりを付けると、俺にそこに座るように促した。

酔いの冷めた俺に一杯ご馳走してくれらしい。

差し出されたグラスには少し黄色がかつた透明な液体が注がれてあり、恐る恐る口付けたそれは、かなり度がキツイものだど焼ける喉が教えてくれた。

それに顔を絞る俺を見てフロントはケラケラと笑いながら、親指を立てて、うまいなと、また人なつつこい顔を俺に覗かせてきた。

俺は笑いながら親指を立てた。

そしてそれをチビチビとやりながら、涼しい夜のプールサイドバーで俺は、フロント相手にくだらない語学の教え合いをしてその日を跨いだ。

そして機嫌が良くなったところを見計らって部屋に引き上げたが、今度はガサゴソの音を期待しながら、そしていつの間にか眠りに入ってしまったのだった。

少しガンガンする頭を擦りながらロビーに行くと、朝食を用意しているフロントが挨拶してきか、明らかに顔は笑っている。

ワンプレートに彩りよく盛り付けられたその料理はエスニックそのものの匂いがして、俺は朝からやはり自分が南国にいるのだと確かめた。

少し辛い味に舌鼓を打ち、ヤケに甘いコーヒードホツしていると、フロントがそんな様子の俺に近寄ってきた。

今日は何するか？

俺は一枚の、そう、親父の写真を見せて、そこに写るこの島の人を探すと言った。

フロントはその写真の裏の名前を見ると、狭い島だからこの人知っていると云った。

俺は驚き、声が出なくなりながらも合わせて欲しい頼むとフロントは首を横に振り、そして言った。

死んでしまったね。少し前。

そしてもしそれでも彼の家に行くならと、昨日の車を出して案内してくれることとなった。

俺は礼を言いながら急いで支度をした。

観光を目的とした街から離れ、案外長い時間を掛けて車は山の道をひたすら走った。

その間はやはりカーステレオはかなり大きな音を出していたが、自分の住んでいるところとの違いが至るところにある景色に、目だけでなく五感が集中していたためか、それはあまり気にならなかった。きつとそれがメインの通りになるのか、島を回る環状線なのかはわからないが、車はそれから細い道に入ってスピードを落とし、簡単な作りの家々が並ぶ田舎町、いや村のような所を通り、そしてその内の一軒の前で車は止まった。

運転手は俺に車で少し待つように言うと、その家にズカズカと勝手に入り込んだ。

俺は心配気にそれを見ながら、誰だか解らない人にいきなり会いに来て何だかおかしく思われないうか？どんな話したらいいのだろうか？と頭をフル回転させながら、緊張している自分を抑えるのに必死になった。

しかしそんな事をヨソに、運転手は家の奥からお婆さんを連れて来て、俺に手招きした。

俺は車から慌てて飛び出すと、お婆さんは手を合わせて挨拶してきた。

俺も釣られて手を合わせて挨拶すると、そのお婆さんに例の写真を手渡した。

するとお婆さんは何やら早口で言葉を残し家に入ったかと思うと、何だか古ボケた珍しい箱を持って戻ってきた。

そしてそれを俺に笑顔で手渡すと、その箱を持った俺の手を優しく擦った。

革でできているその箱はあまり馴染みがない面持ちで、アタッシュケースに似ているそれには鍵が掛けられていた。

鍵。

俺はポケットから写真達と一緒に入っていた鍵を取り出し、それを鍵穴に差し込んでみると、鈍い金属音が中から聞こえてきた。

そして開かれたその箱の中からは、

サングラス越しに見える風景を楽しみながら俺は、バイクに跨り海岸沿いのくねくね道をゆっくりと走っていた。

あのカバンに入っていたのは親父が書いていた日記、それと写真にあった友人である彼に、友情の印として預けていたこのバイクの鍵。そのバイクはかなり古い形のようにだったが、丁寧に使われていたせいか、綺麗な状態と完璧なコンディションを保っていた。

そして親父の日記には、島をゆっくりと時間を掛けながら一周して色々な珍しいものを目にすると、細かくそれを書き残してあり、またいつかこの島を訪れて、同じようにこのバイクで島を周りたいたいと最後に締めくくっていた。

それを読んだ俺は、その頃の親父に会いに行ける気がして、お婆さんが案内してくれた納屋から出した、このバイクに跨る事を決めたのだった。

そしてその日記を辿りながら、のんびりとした旅に出たという訳だが。

俺は少し当てならない地図のせいで迷ってしまったらしく、そんな

道の袋小路でバイクを停めた。

周りは波と風の音と潮の匂いしかない。

俺は急ぐこともないかと、タバコに火を付けると、その懐かしい甘い香りに目を瞑りながら、この頃それがヤケに気に入っている一つになってしまったとニヤけるのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます。では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9367e/>

---

ラブカクテルス その78

2011年3月28日17時01分発行